

## 京葉旭会 第七回

### 『筑前琵琶演奏会』を鑑賞して

伊藤 眞作

風薫る雨上りの昼下がりに、息子に連れられて、池袋にある東京芸術劇場のシアターウエストの筑前琵琶を聴きに行った。

私にとってこれははじめての体験である。長い行列に従って会場に入った。満席である。中年の御婦人方が多いような気がする。

やがて、藤巻 加奈子氏の司会で会は進行された。以下、そのプログラム次第を記しておく。(以下、敬称略)

一、大楠公 作詞 飯田 胡春

作曲 二世 橘 旭翁

(演奏者)

加藤 旭巴

四家 旭康

楠正成は、朝命を奉じ五百騎を率いて現在の兵庫へ下った。桜井の駅で正行に後事を戒めて故郷に帰す。

足利直義の十万騎と湊川で会し奮戦するが遂に力尽き、民家に入り「七生人間滅此賊」と叫び、弟正季と共に自刃し果てる。

二、月に偲ぶ 作詞 大沢 逸足

作曲 三世 橘 旭翁

(演奏者)

白浜 旭乃

(絃奏者)

平野 旭鶴

この曲には主人公は無く、遠征の将士が霜白き陣営ではるか故郷を想う叙事詩ではじまり、後半は月を見て感慨にふける管公の心情を歌い上げた曲である。筑前琵琶でなくては味わうことのできぬ哀調が込められている。

### 三、衣川

作詞 清水 柳村  
作曲 初代 橘 旭翁

(演奏者)

難波 旭喜  
大庭 旭千雅

若く勇ましく数奇を極めた義経の生涯もやがては終わる。奥州藤原氏を頼ったのも東の間、時の流れに抗うこともできず泰衡に襲われ、衣川に三十一才の生涯閉じる。清水柳村の美文と共に初代旭翁の名曲と言われる曲。

### 四、若き敦盛

作詞 西条 八十  
作曲 三世 橘 旭翁

(演奏者)

平田 旭虹

(絃奏者)

内田 旭章

戦記ものではなく、むしろ、熊谷直実の心情を歌にした敦盛の追想歌となっている。

### 五、吉野山 懐古

作詞 西条 八十  
作曲 三世 橘 旭翁

(演奏者)

藤巻 旭鵬

(絃奏者)

福田 旭翔

澤邊 旭秋

(バレエ)

小林 真梨恵

「歌書よりも軍書に悲し吉野山」と、花の吉野山は数多くの史跡と、戦乱の秘話に彩られてその魅力を倍加している。晩春の落花の中、この地を訪ね、後醍醐天皇の陵に詣でて静かに目を閉じると、六百五十年の昔南朝の兵士たちの雄叫び、人馬の音が聞こえるという叙情曲である。

### 六、大物の浦

作詞 大沢 逸足  
作曲 二世 橘 旭翁

(演奏者)

柴田 旭艶

(上原まり)

一の谷の合戦で、熊谷直実が心ならずも首を切った敦盛は、僅か十七歳。平家公達の中でも特に音楽を愛していたとされる敦盛は笛を携えていた。この楽曲は、

義経一行は、文治元年の十一月、兄・頼朝に追われ京を落ちて西へ。翌年二月、尼崎の大物の浦から舟で脱出する。船出における静御前との別れ、大嵐の中で伝説的な「船弁慶」の活躍を緩急鮮やかに物語る。

### 七、新琵琶楽

#### ● 舞曲 一番

#### ● 黒田節

作曲 三世橘 旭翁

編曲 三世橘 旭翁

(箏) マクイーン時田

(演奏者) 深山

(演奏者) 出演者一同

新琵琶楽とは、戦後宗家が在来の琵琶曲が物語的歌詞を主として来たのに対し、合奏曲として作曲した器楽的作品の総称である。今回の演奏会では新琵琶の中から「舞曲一番」と「黒田節」を演奏いたします。

### 八、千姫

作詞 大沢 逸足

作曲 先代 藤巻 旭鴻

(演奏者) 宇野 旭翔

平野 旭鶴

火災の中から助け出された千姫が、坂崎出羽守を嫌い本田忠刻に嫁いだが、夫に早世された後一人の女性として自由気儘な生活をする。封建の世に咲いた一輪の仇花であった。

### 九、忠度

作詞 大沢 逸足

作曲 三世橘 旭翁

(演奏者) 澤邊 旭秋

平忠度(一一四四〜八四)は忠盛の子、清盛の弟、和歌をよくし藤原俊成の弟子として名高い。「千戴集」、「新勅撰集」、「玉葉集」などに数多くの歌が収められている。文武に優れた武士として武勇伝も多く伝えられている。

### 十、羅生門

作詞 佐藤 菊南

作曲 三世橘 旭翁

(演奏者) 福田 旭翔

源頼光は、九条の羅生門に夜な夜な妖怪が現れると

いう巷の噂を耳にすると、その真偽を渡邊綱に命じて探らせる。単騎羅生門に向った綱は、首尾よく金札を立てて終わったが、噂のように現れた妖怪に名剣をふるい、その片腕を切り落として持ち帰った。

### 十一、娘道成寺

作詞 船水 旭容

作曲 小原 旭成

(演奏者) 菊池 旭桜

高津 旭房

林 旭倅

歌舞伎で有名な娘道成寺を琵琶化したもの。恋慕う客僧が道成寺に逃げ込み鐘の中に匿われる。それと知り娘は、蛇と化して鐘もろとも焼きつくし、己は日高川に投身する。

### 十二、敦盛

作詞 田中 湧外

作曲 鶴田 錦史

(演奏者) 田中 錦煌

源平須磨の戦いで、平家の若武者敦盛は、味方の船に乗り遅れ、源氏の強者熊谷次郎直実と呼び止められ

る。敦盛は覚悟を決めて引き返し勇敢に戦うが遂に組み敷かれる。首を切ろうと兜を引き寄せた直実は、あまりの美しさに助けようとしませんが、時遅く味方の軍勢が押し寄せ、直実は泣く泣く敦盛の首を落とす。平家物語の中でも一際哀れを誘う場面です。

### 十三、伏見の吹雪

作詞 達邑 玉蘭

作曲 初代橘 旭翁

(演奏者) 内田 旭章

常盤御前は今若、乙若、牛若の三人の子供をつれ伏見の里に行くが道に迷い、一軒の家に立ち寄り宿を乞うが、この家の主人は元源氏の家臣で今は平家の侍で捕らえられると思つたが、情けを知る主人は親子四人を大和路へと落としてやったのである。

.....

これこそ一幅の絵巻物ではないか。互いの軍勢が対峙し、鏑(しのぎ)を削る音。飛び交う矢音。……。

またこれは、心理描写でもある。心の内の相争う二つの固まりが対決し、互いに主導権を求めて動く。そ

の激しさは、まさに、性格描写そのものであろう。

出し物の配列にも、細かな工夫の跡がみえる。

それらの内容は、ほとんどが高校の一般教養の延長であって、決して難しいものではない。ぜひ一度、お勧めしたい。

なかでも

十、敦盛

六、大物の浦

十一、娘道成寺

などが心に残った。

会場を後にして、鬼子母神のうつそうとした森の中の喫茶店で、しばし感慨に耽った。都電で、夕暮れの飛鳥山に遊び、地下鉄で戸塚安行を過ぎ、家路に着いた。

今でも思い出に残る貴重な一日だった。

(二〇一九・二・二六)

東京芸術劇場 シアターウエスト  
平成二十九年六月十二日(月) 開演...十三時  
京葉旭会 第七回  
主な出演者  
田中錦煌  
柴田旭艶  
(上原まり)  
京葉旭会会員  
内田旭幸・津達旭秋  
藤巻旭晴・平田旭虹  
福田旭翔  
他  
(助演) 小林真梨恵 (バレエ)  
(マクイ) 時田・深山(箏)  
入場料 2,000円  
お問い合わせ先電話番号  
会 文(内国券): 047-353-0257  
事務局(観客券): 03-3957-7432